

# 長崎原爆76年 被爆者代表・岡信子さん(92)

## 「語り継ぐ命ある限り」

一瞬で焦土と化し、罪のない多くの命が奪われた長崎。「核兵器は絶対にだめ」。切なる訴えは今年、核兵器禁止条約の発効に結実したものの、日本政府は背を向けたまま。核廃絶の実現はいまだ見えず、高齢化した被爆者らの焦りは募る。「長崎を最後の被爆地に」。世代を超え、平和を求め祈りの声が街に響き渡った。  
(1面参照)



長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で、「平和への誓い」を読み上げる岡信子さん=9日午前、長崎市の平和公園(代表撮影)

「私たちが被爆者は命ある限り語り継ぎ、核兵器廃絶と平和を訴え続けていくことを誓います」。長崎市の平和祈念式典で、「平和への誓い」を読み上げた被爆者の岡信子さん(92)＝長崎市住吉町＝は、看護学生として救護活動に尽力した当時の体験を語り、核なき世界の実現を訴えた。  
当時16歳で、大阪の看護専門学校に学生だった岡さんは、大阪大空襲で病院が爆撃されたため、長崎に帰郷し、爆心地から1・8キロの自宅待機中に被爆。左半身にガラス片が刺さる大けがをした。「キウウゴシユットウセヨ」。日本赤十字社長崎支部から出頭を命じた電報が届いたのは、原爆投下から3日後のこと。母や弟も被爆し、けがをしていたが、「私は日赤救護員だから」と不安な気持ち

### 次々運ばれる患者 うじだらけの遺体 16歳 救護現場の記憶生々しく

を抑え、市内の救護所へ駆け付けた。  
救護所は、新興善国民学校でも見たことがない」と話すほどの惨状だった。3階建ての救護所に次々と被爆者が運ばれ、悪臭が立ち込めていた。亡くなる人も多く、女性2人でトラックの荷台に角材を積み重ねるように遺体を投げ入れた。苦しみのあまり、救護所から飛び降りる人もいた。胸から腹までうじだらけになった遺体を見て、思わず逃げだそうとしたが、「それでも救護員か」という衛生兵の声で使命感を取り戻した。  
不眠不休で救護に当たりながらも、行方の分からない父のことが心配だった。脚の傷にうじが湧き、きりで刺すような痛みを感じつつ、暗くなるまで町中を捜し回った。途中、腹から飛び出した内臓を両手で抱

え、ぼうぜんとして立っている男性や、首がちぎれた赤ん坊に乳を飲ませようとする若い母親を見た。「もう私の体も限界だ」と思った時、時津国民学校救護所で、大けがをした父と再会した。「お父さん生きていた！私、頑張って捜したよ！」と泣いて抱き付いた。

被爆者代表としては最高齢。「原爆の恐ろしさを伝えるために、この年まで生かされた」と語る。誓いは、「亡くなった被爆者の無念を伝え、若い人にある苦しいことをさせたくない」との願いを込めた。「私の後ろには原爆で亡くなった大勢の人々が立っている」と岡さん。平和を祈る犠牲者の声なき声を背中に受け、かみしめるように訴えた。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

ＮＩＥワークシート／小学校高学年／高校／社会／総合

名前【 】

①長崎への原爆投下について、いつ投下され、被害はどうであったかを調べてみましょう。

②被爆者代表・岡信子さんの「平和への誓い」から感じたことや考えたことを書きましょう。
